

日吉台地下壕保存の会会報

第61号

発行 日吉台地下壕保存の会

2002年年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会会長

大西 章

日吉台地下壕保存の会の皆様、明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひします。新年を迎えるにあたり、昨年1年を振り返るとやはり9月11日は決して忘れることの出来ない日でした。ニューヨークの貿易センタービルに民間航空機が激突し、2つのビルが崩落する様子を伝えたTVの映像は想像力のあまりない私にとってはバーチャルな世界の出来事としてしか映りませんでした。数千の恐怖と悲鳴が瞬時に押しつぶされていった様子を現実として想像することは容易ではありませんでした。時間が経つにしたがって、情報が多くなり、事態が少しずつわかるにつれて、あの惨事がリアルな出来事として理解されていきました。しかし、正直に言ってまだ私にとっては非日常的なものとしてしか思えない部分があります。その時から4ヶ月が、アメリカの空爆が始まり、3ヶ月が過ぎようとしている現在は少し冷静に考えられるようになりました。

ITの発達により、「情報」(もちろん操作されている可能性のある情報です。)がリアルタイムで茶の間に飛び込んでくるようになり、これを見極める力がますます大切になってきます。またグローバル化に対する懸念です。いろいろな場所でお互いが知っている地域だけで流通するエコマネーなどが広がっています。人間が分かり合える空間や時間には矢張り範



囲が存在するような気がします。その間を埋めるには歴史から学ぶ必要性を感じます。そしてそれを理解することにより、それを乗り越えて前に進めるような気がします。その意味で歴史を学ぶのにはやはり歴史的な文化財に語りかけてもらうのが重要なことと思います。「もの」から語りかけてもらうことにより、「もの」を調べ、「もの」を学ぶことは、将来を考える一つの判断基準になると思います。ますますこの地下壕の歴史的な重みが増してきたのではないのでしょうか。

昨年1年間の活動を振り返ると、戦争遺跡保存全国シンポジウム神奈川県川崎大会現地実行委員会のメンバーとしての活動、「戦争を歩く・みる・ふれる・ピースロード多摩丘陵」の出版、横浜市議会への請願書、松代大本営地下壕の見学会、約千名の地下壕案内などいろいろな活動してきました。特に慶應義塾が地下壕を整備してくれたことによりいろいろな活動範囲が広がりました。特に地元の小学生250名が授業の一環として地下壕を見学しました。見学後も授業に呼ばれ、質問など児童と討論してきたことはこれからの活動方向を示唆するものと思います。これからも日吉台地下壕の保存のために活動を続けていく所存でありますので、会員の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

其輪艦政本部地下壕埋め立て工事に伴う 学術調査等要求請願署名運動について

結果不採択、だが幾多の成果も

会報60号に同封し、署名にご協力をお願いいたしました「日吉台海軍省艦政本部地下壕の請願」は、12月3日に横浜市議会事務局に、下記の請願内容を、大西会長他1112名の署名をもって提出いたしました。

1. 横浜市は「日吉台海軍省艦政本部地下壕」について、防災安全工事を進めるとともに、地質、歴史、考古学、土木、建築学、文化財分野の公的調査体制をとり、直ちに学術調査・研究を進めること。
2. 横浜市は、この戦争遺跡「日吉台海軍省艦政本部地下壕」を必要な安全対策をとった上で壕の大部分を保存し、後世に伝えるとともに、二度と忌まわしい戦争を繰り返さないよう、多くの市民とともに戦争の真実に迫り、この戦争遺跡を平和構築に活用すること。

12月の議会に請願を提出する事を決め、12月3日の締め切り日まで3週間足らずでした。会員以外の方には手渡しでお願いしたような状態でしたが、千名以上の署名が集まりました。ご協力有り難うございました。12月13日の横浜市議会大学教育常任委員会で「請願18号」として審査されましたが、20分ほどの質疑、審査の後、「不採択」の挙手多数で不採択となり、12月20日の本議会で決定いたしました。市は学

術調査を行わず、文化庁の判断を待つ。埋め戻し工事は計画通り行われることになりました。

保存の会では請願提出に先立ち、横浜市議会の各会派（自民、民主、公明、共産、市民ネット、市民の党）に紹介議員になっていただくよう、資料を持って、お願いに回りました。高野明子（共産党）、柏美穂（市民ネット）と那原寛子（市民の党）の3党の方が紹介議員になってくださいました。他の会派は、「日吉台地下壕」について関心は持たれていますが、横浜市が出した



た保存の会と戦争遺跡保存全国ネットワークへの回答（2000年保存の会の要請、2001年全国ネットの決議、2件とも艦政本部地下壕について市は学術調査を行わない、地下壕は改良上で封鎖）を支持する立場なので紹介議員は引き受けられないとのことでした。議会の全会派、特に多数派の支持を受けずに請願を通すことは困難です。結果として採択されなかったことは大変残念であり、今後とも議会多数派を含めた大方の理解が得られるような努力が必要ですが、今回「艦政本部地下壕」の事が初めて議会で討議され、その存在と意義、現状を知らせることができ、またアクションを起こしたことで得られた収穫は大きかったと思います。

昨年から行われている「艦政本部地下壕」の埋め戻し工事、「日吉の丘公園」工事中に発見された「箕輪横穴古墳群」の事などはこれまでの会報でお知らせしてきました。保存の会は「艦政本部地下壕」の学術調査、埋め戻し方法について横浜市防災課や文化財課、公園課などと何度も話し合いを持ちましたが、市の回答は「平成15年までに行われる予定の文化庁による近代遺跡詳細調査の成り行きを見守る。」でした。その過程で日吉キャンパスの「連合艦隊司令部地下壕」はともかく、「艦政本部地下壕」は文化庁の所在調査に近代の戦争遺跡として報告されているのか？という疑問が湧きました。もし報告されていなければ、私たちは「艦政本部」について私たちは全く架空の話をしているのです。11月下旬に情報公開で「近代遺跡所在調査票」を入手し、二つの地下壕は文化庁に所在報告されていることが分かりましたが、「艦政本部地下壕」は11月11月22日に、（委員会審議を想定して）駆け込むように追加申請されていました。戦時中に多くの人々の血と汗の結晶として造られ、戦争の悲惨さを伝えるこの地下壕を遅ればせながら文化庁の所在調査の中にリスト・アップ出来たのも請願を行った成果と言えます。

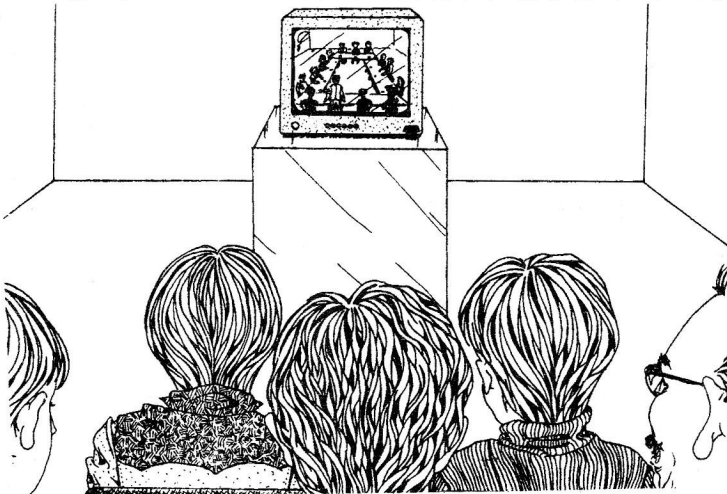
請願の審査中はストップしていた埋め戻しの2期工事が始まろうとしています。1月中に公園側の地下壕入り口は3メートルの改良土と土壌で閉鎖される予定。災害対策室所管の部分は2月に2本のトンネルの奥、半分くらいを埋め戻すとのことです。工事は

議会の終わった12月21日に始まる筈だったのですが、地下壕の近くに住んでいる方から工事にあって住民への説明が不十分であり、納得できないという声があり、話し合いの結果1月24日に住民への説明会が日吉台小学校で設定されました。ここでも横浜市は工事計画を変更する意向はありませんでしたがこれからは住民への説明をきちんとするという事です。地下壕付近の住民は、安全のため埋め戻しに賛成の方が多いのは当然ですが、何がどれほど危険なのか根拠のある説明が欲しい、戦争遺跡の価値は認めるので良い整備の方法はないのか、等の意見も出ました。港北区の議員さんも2名参加され、議会請願で不採択であっても、議会でも様々な意見が出ているし、検討の余地はあるのだから・・・と言われていました。20数名の参加者に艦政本部地下壕の資料をお渡ししておきました。1月13日これが最後かも知れないと思いながら、「艦政本部地下壕」の写真撮影等記録のための調査に入りました。連合艦隊司令部地下壕と違い、コンクリート、素堀部分、人谷石部等が入り交じった未完成の2キロメートル



12月13日入学教育常任委員会の審査風景。委員11名。後ろを向いているのは当局見解を述べる入田教育長。

もの壕。海軍は霞ヶ関からこんな穴にやってきて何をするつもりだったのでしょうか。今も残るトロッコの跡、ツルハシの痕。当時を想像すると背筋が寒くなるです。本物の「戦争遺跡」の教育力は大きい。やはりこの遺跡は学術調査と整備をきちんと行い、見学・学習の場に活用したいと思うのですが・・・。



横浜市議会では本会議は直接傍聴できますが、常任委員会、特別委員会等は直接は傍聴できず、別の部屋で固定式のモニターテレビの中継を見ることになっています。委員会審議で殆どのことは決まるのですが。

日吉台地下壕の文化庁調査票について

日吉台地下壕に関する調査票は別紙の通りです。

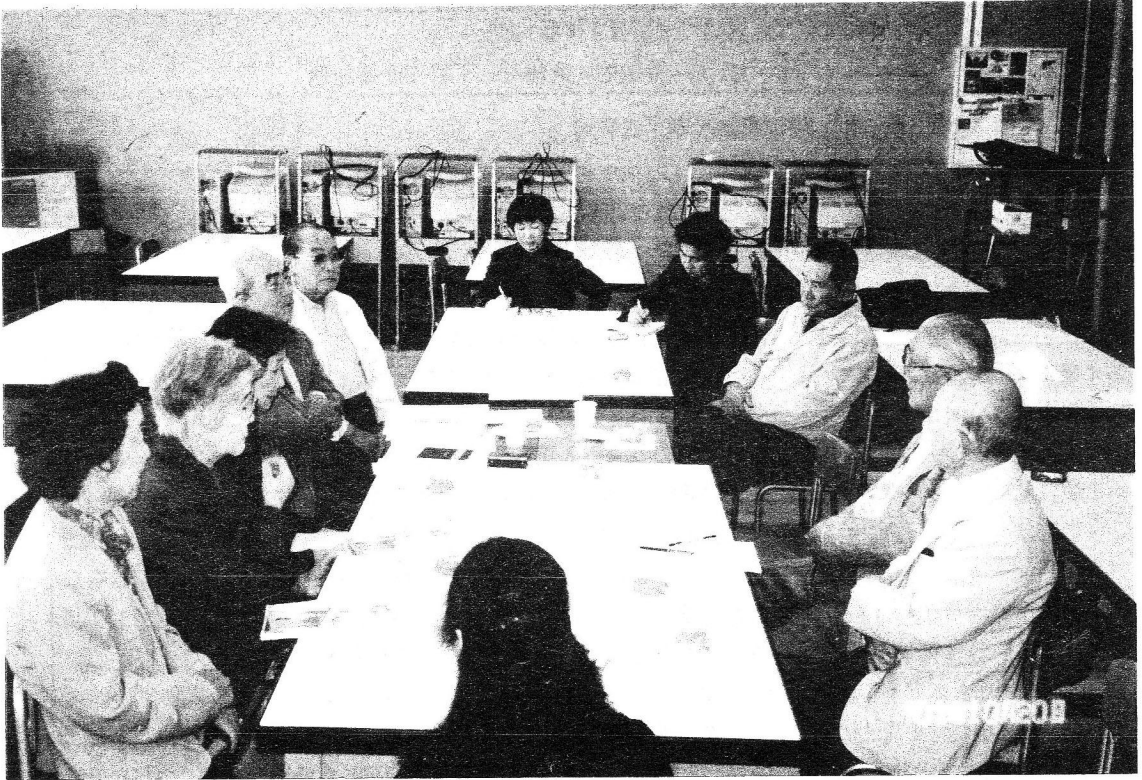
近代遺跡所在調査票

都道府県名：神奈川県横浜市

分野	政治軍事に関する遺跡	遺跡の名称	日吉台地下壕
遺跡の所在地	横浜市港北区箕輪町一丁目126番地他、 日吉本町三丁目1577番地他、箕輪町三丁目423番地他		
所有者	横浜市、慶應義塾大学、民有地		
遺跡の年代	昭和19年7月～昭和20年8月		
遺跡の説明	<p>日吉台地下壕は、慶應義塾大学日吉キャンパス内に所在する連合艦隊司令部、大本営海軍部軍令部第三部、海軍省人事局及び西方の民有地から公團予定地にかけて存在する海軍省艦政本部等の地下壕によって構成されている。地下壕の建設は、昭和19年7月に始められ、完成した部分から使用された。</p> <p>日吉キャンパス内に所在する地下壕のうち最も堅牢である連合艦隊司令部地下壕は、司令部が置かれた寄宿舎と一体化した壕で、厚さ約40cmのコンクリートで覆われ、幅約3～4m、高さ約3mの形状である。長官室、作戦室、通信室、暗号室、バッテリー室、倉庫など中枢施設が造られていた。地下壕司令部からは、大戦末期約1年間においてレイテ作戦、沖縄作戦、特攻隊出撃命令などの作戦指令が出され、全海軍を指揮する総司令部を兼ねていた。本地下壕は、平成13年3月に慶應義塾大学によって整備工事が進められ、見学が安全に行われるようになった。</p> <p>海軍省艦政本部地下壕は、北から南に張出す台地の地下、南北300m×東西200mの範囲に10本のトンネル状の穴を南北に掘り、それを東西に網のようにつないでいる。地下壕の長さは2km以上に及ぶ。工事途中からセメントが底をついたため、一部大谷石を資材に転用した箇所や索掘りのままの状態もある。昭和20年8月14日に完成したが、海軍省艦政本部はこの地下壕に入ることなく終戦を迎えた。</p> <p>本地下壕の北半部は崩れる危険性があり地権者等の意向により安全対策上内部を埋戻し、南半部は内部に入って迷子になる恐れがあることから入口部を閉鎖する工事を平成12年度から平成14年度まで順次実施している。</p>		
保存の状況	連合艦隊司令部地下壕他：構造物(コンクリート壁)は良好に残存 海軍省艦政本部地下壕：北半部は崩落の恐れあり。		
管理の状況	連合艦隊司令部地下壕他：大半は慶應義塾大学により管理、一部民有地 海軍省艦政本部地下壕：埋戻し、入口部閉鎖については横浜市が対応。		
指定の有無	なし		
遺跡の評価	■		

2001・10/20 学習会

元理事生、通信兵の方々から 話を聞く会(続編)



戦時中の思い出を話される元理事生、通信兵の方々(於 慶応高校旧吉校舎内)

◆空襲の時はどうされましたか？

津田さんは、空襲の警報が出ると、軍令部の地下壕(第一校舎とグラウンドの間)へ何も持たずに待避したそうですが、平賀さん、穴山さんは帳簿類の詰まった荷物を背負って、待避されたそうです。「重い荷物を背負って階段の上り下りの大変だったこと。これが一番記憶に残っています。」と平賀さん、穴山さんは口々におっしゃっていました。

渡辺さんは「防空要員」として地下壕に待避した後も入り口から外を見ていて、矢上川の上空を「P51がゆうゆうと待っているのを見ました。」(昭和20年4月頃の空襲時) また3月10日の東京大空襲の日ちょうど宿直で、東京方面の夜空が真っ赤に燃えているのがよく見えたそうです。

栗原さんは昭和20年4月の空襲の時に「まわりの農家がどんどん燃えている」のを見て、何とかしよう」としたそうですが、住んでいた人たちがいなくなっていて「手の打ちようがなかった」そうです。

まさに私たちの街が戦場になっていたのです。

◆ 終戦の時の様子を聞かせ下さい。

8月15日の「終戦の詔勅」のラジオ放送を聞かれたのでしょうか？そして、そのあと、どういうことがあったのでしょうか？軍令第3部（情報部）に勤めておられた津川さんは、現在バレーコート等のある「まむし谷」に集合して、ラジオ放送を聞かれました。そして「ドイツの敗戦の時情報関係の女の人まで処刑されたという話が伝わってきましたね。私たち理事生には、青酸カリを渡されるということにはなかったのですが、もう翌日からみんなパーッと散ってしまっ。私もそのあと日吉に来たのは1回きりでした。」という状況になったそうです。その後、実際に軍令第3部から戦犯に問われた人が出て、「ハルピン大学を出てソ連関係の情報を扱っていた人と、中佐が一人絞首刑になったと聞きました。」とのお話でした。軍令部で経理の仕事をしてきた平賀さんと穴山さんは終戦のラジオ放送を「第一校舎の中庭で兵隊さん達と一緒に」お聞きになりましたが、情報関係の方たちとは違って、その後も残務整理のために数ヶ月間（穴山さんは9月まで、平賀さんは12月まで）日吉で仕事を続けておられました。そして、「アメリカ軍が来るから、その時に着るようと言われて、紺色のモンペの様な物と上着を支給されて、実際アメリカ兵が来たときそれを着ました。」ということがあったそうです。ただ「あとから思うと8月15日の2～3日前に兵隊さんだけがどこかに集まったことがあって、戻ってきた曹長さんが深刻な顔で軍刀を手を持って、は腹を切るの痛かろうと言っていたんですよ。」「あの時兵隊さん達はポツダム宣言受諾を聞かされていたんじゃないでしょうか。」というお話もありました。他の方々はずでに8月の終戦のときには日吉を離れておられ、網野さんは海軍省人事局の移転した越後湯沢の「観光ホテル」（海軍省が接收）で終戦のラジオ放送を聞いておられます。また同じ人事局の理事生であった渡辺さんは終戦の直前に徴兵のため陸軍の部隊に入営し、そこで8月15日を迎えておられます。栗原さんは下川（伊豆）の海軍の部隊におられました。網野さんは「終戦のラジオ放送を聞いたときは嬉しかったですね。ところが翌日から竹槍の訓練をやらされた。ソ連が来る。というのでね。」と語っておられました。渡辺さんも「いや、あの時軍隊では終戦じゃない、一時停戦だ。と言っておったんですよ。」と話しておられました。そして津川さんの「8月15日の帰りの電車の中で明日からは灯火管制がなくなって明るくなるんだな、と思って嬉しかったですね。」という言葉には皆さん「そうでしたねえ。」と頷いておられました。



皆さんのお話を聞いて、私達は昭和19年～20年当時の日吉の様子をリアルに知ることが出来ました。また、この日お集まり下さった理事生、通信兵の方々もその当時は知ることの出来なかった自分の職掌以外の分野での実状を今回初めてお聞きになり、知ることが出来たそうです。実際、終戦の迫っていた頃の日吉の雰囲気は「周りをキョ

ロキョロ見回していると（憲兵に）つかまりそうな雰囲気です。散策など出来なかった」ので「日吉のキャンパスがこんなに広いとは知りませんでしたよ。」（渡辺さん）という状況だったそうで、旧軍隊に特有の秘密主義に覆われていたようです。だからこそ今、私達が歴史を少しでも広く、正確に掘り起こし、それを語り継いでゆくことが重要になっているのだと思います。あの戦争の歴史を繰り返さないために。お話を聞かせてくださった元理事生、通信兵の皆様、本当にありがとうございました。（文責：富沢慎吾）

《「理事生」とは？》

軍令部や海軍省で雇い入れた事務員ならびに翻訳やタイプなどの技能を持つ職員のこと、女性が圧倒的に多かったそうです。

“身分”は「雇員」（官庁で「事務官の仕事の助けるために雇う」「任官していない職員の名称」—『岩波国語辞典』より—）で、「判任官」（各省大臣が任命した「最下級の官」—同上—）の下で働くしくみになっていたようです。

当時の社会では身分によって待遇に格差が付けられており、日吉でも食事をする場所も「雇員」は「雇員食堂」「判任官」は別の食堂と分けられており、「そこで支給される食事の内容も「雇員」は雑炊というより汁かけ飯でしたね。」という粗末なものであったのに対し「判任官」は「真っ白なパンでした。私は一度だけ判任官の食堂で食べました。」（渡辺さんのお話）という状況であったようです。

（富沢慎吾記）

日吉から松代へ

【松代交流・見学会感想前号よりの続編】

「無言館」「松代大本営」を訪ねて

岡崎文代

紅葉した木々の中に、教会を思わせる十字架の形の建物が建っている。無言館の中心に立てば四方が見渡せる。死んでいった若き両学生達の無念の想いが、そして残された者達の無言の悲しみがひたひたと押し寄せる。一枚の「裸婦」の前に立つ。くすんだ光が裸婦の内側から真綿のように滲む。初々しいその美しさに息を呑む。あと五分、十分この絵を描き続けたい。生きて帰ってきたら必ずこの絵の続きを描くからと言って戦争に行った若者は帰ってこなかった。一枚の精巧な紫陽花のスケッチ。下絵の鉛筆のあとが痛々しい。生きていたらこの大きな絵はどのように仕上がっていたのだろうか。戦争に直面した両学生達はどうか、どう死んでいったら。無言館の中で私は立ちつくしていた。

十年程前、娘が小学校の修学旅行で松代大本営を見学し、篠ノ井旭高校の高校生達と

交流したと興奮気味に私に話したことがある。十五年戦争の敗戦間際に掘られた松代大本営。日本軍は本土決戦の最後の拠点として松代に地下の要塞を築いた。政府機関などが入る予定の象山地下壕、大本営、宮内省などの舞鶴山地下壕を見学させていただく。強制連行された朝鮮人労働者などにとって、どれほど過酷な労働だったのだろう。深く掘りすめられた暗い岩盤を見ていると、その惨さに胸が痛くなる。同じ人間だということに彼らの命のなんと軽いものだろうか。

今まで私が見てきた沖縄のいくつかの GAMMA や海軍の司令壕、浅川の地下壕、市ヶ谷の陸軍司令部壕、日吉の海軍司令部壕……。松代大本営の地下壕をこの目で見て、沖縄であれほど追いつめられても、降伏することが出来なかったのは、天皇が入るはずのここが完成していなかったからなのだ、あの悲劇は実は連動していたのだという事が今更のようにくっきりと分かった。

松代大本営の保存をすすめる会の懸さん達は、この壕を様々な困難を乗り越えながら守っておられた。私たちのために、おやき、りんご、お蕎麦のフラミンゴ、おいしいお茶などでもてなしてくださった。心から感謝する。

しかし、彼らから学ぶことはいっぱいある。近現代史での地下壕の位置づけをはっきりさせる。事実を知るための関係者の発見と証言、調査、無理のない保存運動の長期的見通し、県や国への働きかけ、他の地下壕との連携、たくさんの人々に知ってもらうための保存運動の進め方、運動の拠点の必要性、事実を伝えるガイドの養成、等、様々なことがあるだろう。

また日吉の保存の会の人たちは突然参加させていただいた私にも親切にいろいろ教えてくださって、とても楽しい意義のある旅だった。無理をしないで出来る範囲で、息の長い運動を進めてきたことはとても大切なことではないだろうか。そして地下壕で遊んで育った頼もしいすてきな若手がいるということは保存運動の未来を感じさせられた。

見学会から

◇韓国・光州事件のリーダー金げんしょう（キム・ヒョンジャン）さんが地下壕見学に参加されました。12月の定例見学会（16日）に今、東京大学で近現代史（思想史）を研究しておられる金さんが参加され、見学会のあと、短い時間でしたが、お話を聞くことが出来ました。金さんは1980年5月クーデターで誕生した全斗かん軍事政権に反対し、朝鮮大学（光州市）の学生として民主化を求めて決起しましたが、中心人物の一人として逮捕・投獄され、死刑判決を受けました。その後、減刑、15年後に釈放になっていますが、友人達はすべて軍事政権の大弾圧で死んでおり、たった一人生き残りました。そのとき金さんは「これは天が私に民主的な社会をこれから築くように命じたのだ。」と思ったと語っておりました。温かい人柄の中に強い意志の感じられる素晴らしい方でした。（富沢・記）

連合艦隊司令部の思い出

元連合艦隊司令部通信兵 栗原啓二

私は、昭和19年2月、山口県防府海軍通信学校に、第五期普通科暗号術練習生として入校しました。同年8月、卒業。同時に海軍省にある東京通信隊に勤務いたしました。東京通信隊では三日に一回の外出があったので、池袋にあった実家に帰るのが唯一の楽しみでした。

ところが昭和19年9月29日朝、連合艦隊司令部付を命ぜられ、旗艦大淀が木更津沖に停泊しているから、木更津に行けと命令され、木更津までの電車賃を貰いました。出発の時にあって、司令部は陸に上がったから、口吉の慶応大学に行くよう命令を受けました。その時東京通信隊からは12、3名行きました。当時の口吉駅は木造の階段があり、階段を上がると左右に分かれ、左に行くと慶応大学の方に出ます。大学の人里口の道路は両側に銀杏の木が植えられ、葉が黄色くなっていました。先口訪れたとき、その銀杏がすごく大きくなっているのに驚きました。

その口から第一校舎の一階の教室に畳を敷き、居住し、そこから地下壕の通信室に通っていました。教室から地下壕までの道は細い道で、途中で弥生時代の墓跡があったのですが、先口行ったときは分かりませんで子した。もう一本の道は教室から出て、赤瓦食堂の前を通過して体育会本部の手前から地下壕の方へ下る道があったと思うのですがよく分かりません。赤瓦食堂というのは私たちはきょう水所と呼んでいたところだと思うのですが、そこは木造二階建てでチョコレート色に塗ってありました。この建物は昭和20年4月4日の空襲で焼夷弾の直撃を受けて焼け、主計兵一人が死亡したのです。その少し先に、同じような木造二階建ての建物があり、そこに衛兵所、洗濯屋、床屋等がありました。（ここが体育会司令部だと思うのですが・・・）その先に寄宿舎があり、その前の木立の中に地下壕の人里口がありました。（この人里口は20年くらい前に行ったときはコンクリートで塞がれてまだありました。）その後ろの方に無線アンテナが5、6本たっていました。

さて、ローマ風呂ですが、司令部で風呂はここだけでしたので、交代でよく入りに行きました。台地の上にあり、周りが硝子張りで見えが良く立派な風呂だったことを覚えています。先口の見学会で、地下壕にはいるのは56年ぶりで入り口の地形が一変してしまい驚きました。当時中はコンクリートは真っ白く壁には両側に蛍光灯がついていて非常に明るく、電信室、暗号室の壁は板張りで、机は暗号室だけで20メートルくらい並び、前に本立てがあり、暗号書、乱数表などが並んでいました。当時海軍では主に呂号暗号書を使用していました。受信された電報は暗号科に回され、それを私たちが解読するのです。訳された電報は取次兵（暗号科に10名程居たと思います。）によって寄宿舎に届けられます。翻訳順位はキン（緊急電報）、サキ（作戦緊急電報）、ホキ（保安緊急電報）の順になっています。

昭和19年10月中旬捷一号作戦が発動されると、急に忙しくなりました。11月4日、

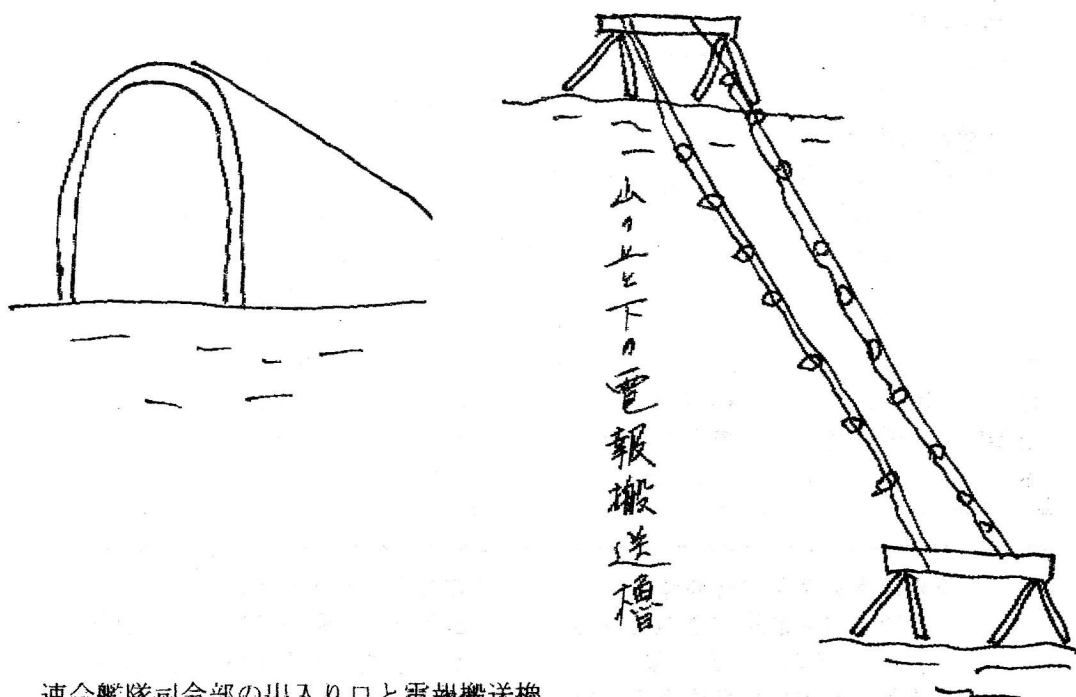
5時間しか睡眠時間が無くて一晩でよいからゆっくり眠りたいと思っていました。取次兵もそれは大変で壕の出入り口から急坂を駆け上って寄宿舍に電報を届けるのですが、それが頻繁です。山の上と下に櫓を組んで、2本の針金を通してカバンに電報を入れ紐でカバンを上げたり下げたりしていました。

同年10月中旬、レイテ沖海戦で30余隻の艦が沈み、皆重苦しい気持ちになりました。同年11月中旬、B29が飛行機雲を引きながら飛んできました。見てみると味方戦闘機が盛んに攻撃しても落ちません。その中の一機が真上から体当たりしました。パッと火が出て味方機はどこに落ちたのか分かりません。B29もすぐには落ちません。だんだん高度が下がりはじめ、見えなくなりました。多分海に落ちたと思います。

私は昭和20年4月中旬まで司令部にいて、新しい部隊(第16突撃隊)回天基地が下田に出来、そこに配属になりました。日吉での空襲は一度しか覚えておりません。機会がありましたら、今度ゆっくり日吉台の周りを見てみたいと思います。

追伸

私たちは、連合艦隊司令部をG.F.司令部と電文に書いていました。例えば発G.F.長官、G.F.参謀、空母をA(エアークラフトキャリアー)、戦艦(バトルシップ)をB、巡洋艦(クルーザー)をCと呼んでいました。



連合艦隊司令部の出入り口と電報搬送櫓
(栗原氏描く)

活動の記録

2001年11月～2002年1月

2001年

- 11月28日(水) 第6回運営委員会(慶応高校物理教室) 会報60号発送
 12月1日(土) 第9回川崎・横浜平和のための戦争展・第5回戦争遺跡保存
 全国シンポジウム現地実行委員会反省会(日吉東急フードギャラリー)
 12月3日(金) 横浜市議会に「日吉台海軍省艦政本部地下壕」の
 保存についての請願提出
 12月16日(日) 日吉台地下壕見学会(保存の会定例見学会)2名
 12月12日(水) 請願追加署名170名分提出 計1113名
 12月13日(木) 請願 市会大学教育委員会で請願第18号として審議不採決
 12月19日(水) 第7回運営委員会(慶応高校物理教室)

2002年

- 1月7日(月) 日吉台地下壕保存の会新年会
 1月13日(日) 艦政本部地下壕の調査写真撮影等参加者5名
 1月10日(土) 文化財課との話し合い
 1月18日(金) 日吉台地下壕のパンフレット作成について

予定

- 1月27日(日) 日吉台地下壕見学会(保存の会定例見学会)
 1月29日(火) 第8回運営委員会 会報61号発送

見学会のご案内

★日吉台地下壕保存の会では、月1回定期的に見学会を予定しています。
 見学希望の方は右記にお問い合わせ下さい。(045-562-0443喜田)
 団体申し込みを含め、下記の日程で見学会を行います。

1月30日(水) 矢上小 2月9日(土) 2月10日(日)
 2月23日(土) 3月1日(金) 3月23日(土)

会計のお問い合わせ：白鶴 邦子 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090
 その他のお問い合わせ：喜田美登里 港北区下田町2-1-3 045-562-0443
 ホームページアドレス：<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

発行 日吉台地下壕保存の会

代表 大西 章

編集 日吉台地下壕保存の会運営委員会

(年会費)一〇千円以上

郵便振込口座番号00250-2-7-74921

(加入者名)日吉台地下壕保存の会